

政治を映すレゲエ アルファ・ロンディはいかに「政治」を歌ったか

著者	鈴木 裕之
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2005-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008200

政治を映すレゲエ

— アルファ・ブロンディはいかに「政治」を歌ったか —

鈴木裕之

❖ 1 「政治」を歌うアルファ・ブロンディ ❖

レゲエは「政治」を歌う。それは1960年代後半のジャマイカにおいて誕生したこの音楽が、その出自をキリスト教的メシアニズムおよびブラック・ナショナリズムを柱とするラスタファリ運動に負っていた故の性のようなものである。

コート・ジヴォワールのアビジャンはアフリカ・レゲエの都だ。現在アフリカ各地で流行するレゲエであるが、もっとも早い時期に「地元」レゲエを開花させたのはアビジャンであり、そのレゲエ・シーンをリードしてきたのがアルファ・ブロンディである。彼は1983年のレコード・デビュー以来、16枚ものアルバム(2枚のライブ盤、1枚のマキシ・シングル盤を含む)を発表してきた。レゲエが他のポピュラー音楽と違うのは、そのリズム、そして歌詞に込められるメッセージである。ジャマイカにおいてレゲエはラスタのメッセージを乗せる媒体として発達してきた。それを模倣するアフリカ人レゲエ・シンガーたちも、「宗教的」

「政治的」メッセージを重視する。もちろんアルファ・ブロンディも。

アフリカにおいて宗教的メッセージを歌うことは、神を冒瀆するのではないかぎりには問題のないことで、むしろ「良いこと」とされる。では政治的メッセージはどうか？アフリカでは音楽と社会の



アルファ・ブロンディ “Merci” のジャケット
(EMI Music Arabia/Alpha Blondy Productions)

結びつきが直接的だ。それは消費される前に機能する。政治的パトロンを讃えるだけならいいが、批判・反抗などしようものなら……。

アルファ・ブロンディはそのデビュー以来、政治的メッセージを歌ってきた。彼は国際的スーパースターであり、そのメッセージも国際的視点に立って発信される。しかし彼はコート・ジヴォワールという国民国家のなかで生まれ育ち、コート・ジヴォワール国籍保有者としての権利・義務関係の枠内で生存している。彼の政治的メッセージは多かれ少なかれこの事実を反映している。

現在、コート・ジヴォワールは政治的激変のまっただなかにある。アフリカの優等生であった安定期の後に、複数政党制が導入され、やがてクーデターが発生し国内が分裂して内戦状態にいたる。こうしたコート・ジヴォワールの政情変化は、彼の歌詞にどのように反映しているのだろうか？



2. 政治的テーマ



アルファ・ブロンディは2003年までにアルバム16枚を発表している。そこに含まれる楽曲133曲（ライブ盤で重複した曲や、他人の曲をカバーしたものは除く）のうち何らかのかたちで「政治」をテーマとしているのは47曲で、全体の約35%にあたる（表参照）。その内容を分類してみると、およそ以下の五つに整理される。

- a 世界システム批判：ジャマイカのラスタファリ運動において、奴隷貿易、植民地化の延長線上に形成されたいわゆる世界システムは「バビロン・システム」と呼ばれる。これは白人至上主義に基づき黒人を抑圧する悪の政治・経済システムであり、粉砕されるべきものとされる。
- b アフリカ政治批判：私利私欲に走る政治家や

軍人により争いの絶えないアフリカの政治的状況を批判する。

- c ウフエ・ボワニ讃歌：アルファ・ブロンディは故ウフエ・ボワニ大統領をコート・ジヴォワール建国の父として個人的に崇拜しており、数々の讃歌を捧げている。
- d パレスチナ問題：強い宗教心を持つアルファ・ブロンディは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地であるエルサレムをめぐるパレスチナ問題に強い関心を示している。
- e その他：上記のカテゴリーに収まらない曲がいくつか存在する。

本稿で取りあげるのはa とb の曲である。ここに含まれる曲は、その内容がコート・ジヴォワールの政治的激変をダイレクトに反映したものが多く、アルファ・ブロンディの歌と政治との関係への理解を容易にしてくれるものである。

アルファ・ブロンディのアルバム

	発売年	タイトル	「政治」を歌った曲数 / 全曲数
①	1983	"Jah Glory"	2曲 / 6曲
②	1983	"Rasta Poué"	0曲 / 1曲
③	1984	"Cocody Rock"	3曲 / 6曲
④	1985	"Apartheid is Nazism"	2曲 / 9曲
⑤	1986	"Jersalem"	3曲 / 9曲
⑥	1987	"Revolution"	2曲 / 7曲
⑦	1989	"The Prophets"	2曲 / 8曲
⑧	1990	"S. O. S. Tribal War"	3曲 / 6曲
⑨	1992	"Masada"	6曲 / 14曲
⑩	1993	"Live au Zenith" (ライブ盤)	2曲 / 11曲
⑪	1994	"Dieu"	5曲 / 12曲
⑫	1996	"Grand Bassam Zion Rock"	3曲 / 14曲
⑬	1998	"Yitzhak Rabin"	6曲 / 12曲
⑭	1999	"Eloim"	6曲 / 14曲
⑮	2001	"Blondy Paris Bercy" (ライブ盤)	7曲 / 20曲
⑯	2003	"Merci"	4曲 / 12曲

(筆者作成)

❖ 3 .コート・ジヴォワール政変の影響 ❖

では、コート・ジヴォワールの政変とアルファ・ブロンディの「政治的」歌詞との関係を具体的にみることにしよう。

【第1共和制】= 安定期

1960年8月7日に独立したコート・ジヴォワールは、ウフェ・ボワニ大統領率いるコート・ジヴォワール民主党(PDCI)による一党独裁のもと、比較的安定した状態を保ってきた。その背景には、親西欧政策、コーヒー・ココアの輸出に支えられた経済的安定、部族主義を助長しないウフェ・ボワニの政治的手腕などがあった。こうしたなか、アルファ・ブロンディの歌う政治的テーマはaが中心であった。

反植民地運動の伝説的闘士サモリ・トゥレのことを歌った Bori Samory (1984, ③ - 6 : 表にあげるアルバム③の6曲目)は、

「走れ、サモリ

白人たちが追いかけてくる

奴らはおまえを殺すと言っている」

という出だしではじまる。曲の後半では「サモリ・トゥレ、奴らがあなたを殺した」という歌詞につづき、さまざまなアフリカの政治家、アメリカやジャマイカの黒人活動家の名が挙げられてゆくが、そのなかに、

「ディアロ・テリ、奴らがあなたを殺した

セク・トゥレ、奴らがあなたを殺した」

というくだりがある。歴史的事実は、ディアロ・テリはセク・トゥレ独裁下のギニアにおいて肅正された政治家であるから、セク・トゥレ政権によって殺されたのであり、いっぽうセク・トゥレ自身は病死であり、殺されたわけではない。もちろんアルファ・ブロンディもこのことは知っているであ

ろうが、あえて奴ら(=白人)が殺したという歌詞を比喩的に使うことで、世界システムがアフリカを抑圧する状況を表現しているのかもしれない。

Coup d'État (1989, ⑦ - 3)では、

「アフリカではあまりにも多くのクーデター
が起きる

あまりにも多くのクーデター、もう十分だ」

というリフレインにつづき、

「ソビエトがやってくる

つづいてアメリカ人が到着する

我らがアフリカは混乱の極み

あちらこちらでクーデター、もう十分だ」

「アフリカの軍人たちは

大国の手のなかで翻弄される犠牲者だ

奴らの意のままに互いに敵対しあう

植民地主義に操られるロボットのように」

と歌われる。ここでは、アフリカの内政問題であるクーデターが、じつは大国の介入によって人為的に引き起こされていると告発され、アフリカ人はあくまでも犠牲者であると強調されている。

【民主化・自由化】= 部族主義の台頭

1989年以降の世界的民主化の流れのなかで、コート・ジヴォワールにおいても90年4月30日に複数政党制が導入され、8月までに25もの政党が新たに誕生した。同年10月に行われた大統領選挙では野党イヴォワール人民戦線(FPI)の党首バボが対立候補として出馬するが、ウフェ・ボワニが圧勝した。しかし93年12月7日にウフェ・ボワニが病死すると、国民議会議長であったコナン・ベディエが大統領に就任。ほどなくウフェ・ボワニ政権末期に首相を務めていたアラサン・ワタラが共和連合(RDR)を結成。ここにベディエ率いるコート・ジヴォワール民主党、バボ率いるイヴォワール人民戦線、ワタラ率いる共和連合が主要政党と

して対立することになるのだが、やがてこれが党首の出身部族を反映して、徐々にバウレ族、ベテ族、ジュラ族の部族対立の様相を呈してくる。

こうしたなか、アルファ・ブロンディは *Multi-partisme* (1992, ⑨ - 2) を発表し、政治の部族主義化に警鐘を鳴らした。

「金がほんの少ししかない

金がなくなった みなが困難に直面している

みな団結しよう、兄弟たちよ、団結しよう

複数政党制は部族主義ではない」

しかし1995年の大統領選を前にして、ベディエ大統領は強力なライバルであるワタラを牽制するためにいわゆるイヴォワリテ法(1994年12月)を施行。北部出身のワタラがかつてオート・ヴォルタ(現ブルキナ・ファソ)国籍を保有していたことを問題にし、彼が大統領候補資格を持ってないようにした。

こうして1995年10月22日の大統領選をめぐる対立が激化していった。

複数政党制 = 部族主義という現状を目の当たりにしたアルファ・ブロンディは、*Multipartisme* 以上に具体的な描写に満ちあふれた *Course au pouvoir* (1996, ⑫ - 4) を発表する。

「路上には血が滴る

権力の塔へ通じる血が

無実の血が滴る」

「対立する政党は同じことを言っている

同じ理由から

この対立のなかで

人民は人民に対峙する

そして人民は人民を虐殺する

人民の名において」

「対立する政党が同意しているのは

互いにけって同意しないということだけ

急進的な野党

急進的な与党

口調は非友好的になる

部族的民主主義」

「彼らは議論をベテ化した

議論をバウレ化した

彼らは議論をジュラ化した」

「個人的な喧嘩がこの共和国を危険に陥れる

情報操作が世論を毒する」

「権力の競争だ

これは権力の競争だ」

結局1995年の大統領選挙ではベディエが圧勝するが、コート・ジヴォワール国内の政治的分裂を目の当たりにしたアルファ・ブロンディは、アフリカの内政に対するより批判的な曲を発表する。

Les imbéciles (1998, ⑬ - 4)

「すべては変化し、すべては発展する

ただ愚か者だけが変わることがない

私は強調し、固執し、署名しよう

アフリカの敵はアフリカ人であると

愚か者たちは後ずさりしながら作り話をすることに決めたようだ

言論の自由を奪われた人々は大砲による狂った交響曲を聴く」

【軍事政権】= 新たなる歪み(ワタラの抑え込み)

1999年12月23日、一部の国軍兵士が中央アフリカでの国連PKOミッションへの派遣手当未払いに対する抗議として、アビジャンの街頭で発砲、略奪を行い、放送局を占拠したのをきっかけにクーデターが発生した。翌24日にはゲイ退役准将を委員長とする軍事政権が成立し、ベディエ政権は崩壊した。

2000年10月22日の大統領選の際には、コート・ジヴォワール民主党および共和連合からの立候補申請が却下され、ゲイとバボの一騎打ちとなるが、



ゲイが選挙結果を捏造して勝利宣言を行ったため、アビジャンで大暴動が引き起こされた。結局10月26日にバボが正式に大統領に就任し、第2共和制が発足することとなった。

この一連の動きのなかで、ワタラ率いる共和連合はつねに排除されており、ワタラの支持基盤である国内北部のイスラム教徒たちの不満はさらに大きなものとなっていった。

【第2共和制】= 内戦状態

国内の分裂状態を收拾するために、2001年10月9日から12月18日にかけて国民和解フォーラムが開催され、バボ、ゲイ、ワタラ、ベディエの間の一応の和解が確認されたが、2002年9月18日から19日にかけてクーデター未遂事件が起きる。クーデター自体は失敗するものの、これをきっかけに国内が南北に二分されてしまった。そしてアビジャンを含む南部では共和連合支持者=北部出身者=イスラム教徒への政治的ハラスメントが激化し、北部出身のジュラ族であるアルファ・ブロンディもしばしばその影響で被害を受けた。

その体験をふまえた Politruc (2003, ⑩ - 8) では、

「ますます悪くなる

物事はますます悪くなる

何を言っても

あの愚か者どもはすこしも理解しない」

「俺たちの大統領の80パーセントは操り人形だ

西側諸国がその糸を操り

操り人形は張りきって動き

権力にのぼせあがる

俺は軽機関銃が怖い」

と批判したあと、

「政治の話はしないでくれ

俺は命が惜しい」

と締めくくっている。



4. 批判される加害者の変化



コート・ジヴォワールの政変を体験したアルファ・ブロンディの歌詞のなかにみられる変化、それは「誰が悪いのか?」という問題である。基本的に「世界システムのなかで苦悩するアフリカ」という構図は変わらないが、この構図のどこを批判するか、そのポイントが変化しているのだ。

かつて、コート・ジヴォワールが平和だった時代にはすべての批判は抑圧者である欧米諸国(「バビロン」「白人」といった言葉で代表される)に向けられていた。ところが複数政党制をきっかけとした部族主義の台頭、クーデターによる国内分裂を経験するなかで批判の矛先が国内において私利私欲をむき出しにしながら民衆を抑圧しているアフリカ人の政治家や軍人に向けられるようになってゆく。つまり一般論から具体論(コート・ジヴォワールの内政)へと表現の方法が変化しているのだ。これは、社会とダイレクトにつながるレゲエがネーション崩壊の危機という緊迫する政治的現実を前にしたときの「健全」な反応であると言えるだろう。

それにしても気になるのは、最後の曲の

「政治の話はしないでくれ

俺は命が惜しい」

という一節。そうはいつでも、政治的メッセージを送るのはレゲエの性。次のアルバムで、アルファ・ブロンディはどんな歌を歌ってくれるのだろうか?

(すずき・ひろゆき / 国士舘大学)